

氏名	はまもと さとこ 濱 元 聡 子
学位の種類	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第217号
学位授与の日付	平成16年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	島嶼間移動をめぐる社会史的な地域研究 —— 〈しま〉 模様の海 ——

論文調査委員	(主査) 教授 山田 勇 (東南アジア研究センター)
	教授 古川 久雄 (アジア・アフリカ地域研究研究科) 教授 山田 孝子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、インドネシア共和国スラウェシ島西部に位置するマカッサル海峡島嶼部地域の地域像を、人とモノの移動の社会史的考察をとおして明らかにした地域研究の成果である。

研究目的は、2点ある。第1に、島嶼部地域および海のある空間を地域としてとらえること、第2に、マカッサル海峡地域を中心にインドネシア東部地域に広がる社会経済的ネットワークの態様をとくに女性の生業活動をとおして多角的に分析することである。より具体的には、次のように説明される。①ボルネオ島(カリマンタン)とスラウェシ島という比較的大きな島嶼部に挟まれたマカッサル海峡島嶼部地域の社会経済的動態を、生業活動をとおして考察すること、②島と島との社会経済関係が海のネットワークとして有機的に構築されてきた背景を、機織りをめぐる社会史の記述によって描き出すことにある。この2点に接近するに際し、本論文は調査対象地の主要な宗教であるイスラームを信仰する人びとの聖地マッカ巡礼に注目した。巡礼経験が生業活動を営むうえで到達点のひとつであると同時に、その後の経済活動での優位および社会的地位の獲得に直結する点が、女性商人の個人史再構築によって説明されている。巡礼経験が海のネットワーク構築に関わる過程が、社会史的な地域研究として記述される。

本論文は序章、第1章～第4章、終章から構成される。

序章では上記2点の研究目的が説明され、調査期間、調査地の設定と問題設定の意義が説明される。さらに本論文の主要な調査対象民族であるブギス-マカッサル人の社会・歴史・文化に関する先行研究が検討されている。これらを踏まえた上で、本論文が地域研究という接近法を取ることの意義が説明されている。

第1章では、マカッサル海峡島嶼部地域における人とモノの移動に関する歴史的考察が試みられている。南スラウェシ地域におけるイスラームの受容、海産物交易の発展と香料交易をめぐる西洋諸国との歴史的交流が、マカッサル海峡島嶼部地域においても確認されることが明らかにされている。このような過程を経て、ひとつの島の中にブギス-マカッサル人以外にバジャウ人、マンダール人、ムラユ人そして華人といった複数の民族集団が居住するようになり、「バランロンボ島人」というアイデンティティを形成してきたことが指摘されている。商業取引や漁業活動は南スラウェシ地域本土で見られるパトロン-クライアント関係に基づいておこなわれる一方、マカッサル海峡島嶼部地域では貴族階級と平民階級といった社会的階層および民族集団間の階層性は顕在化されず、小さな社会を安定させてきた機能としての巡礼経験が、より重要視されることが提示されている。

第2章では、漁撈活動に焦点をあわせ、生業活動における男女の役割が説明される。17世紀以降、一貫してマカッサル海峡島嶼部地域の主要な生業活動であるナマコ漁が、漁具や移動手段の近代化にともない衰退傾向となる一方で、東南アジア市場へ輸出されるハタ漁に取って代わられた。その経済構造の変容が詳細に記述されている。この変容により、従来、船上で食されるためのものであった発酵保存食品の商品化が始まり、調査対象地における生業構造の変化と巡礼者増加に関連し

ていることが注目された。

第3章では、調査地で織られた布が海のネットワークの中できわめて重要な役割を与えられていることが指摘されている。すなわち、布は儀礼に欠かせないものとして、あるいは商業取引を円滑にするための手土産としての働きを有する。これによって調査地から外へと移住拡散する人びとの社会的関係を円滑にし、海のネットワークが構築・維持されていることが、ミクロからマクロの視点へと移動しながら解明されている。

第4章では、ある女性の巡礼経験をとおして、女性の移動と商業活動の社会経済的動態が記述されている。海のネットワークは漁撈活動や交易活動に従事する男性だけではなく、極めて現代的な動機を持つ女性によっても構築、維持されていることが詳述されている。

終章では、以上の議論を整理・検討し、マカッサル海峡島嶼部の地域的特色を結論づけた。人とモノの移動をとおして海のネットワークは構築され、維持されてきた。行政上の境界あるいは国境に制限されることの少ない社会経済的動態は、歴史的ならびに島嶼部と海という生態環境を背景に変化しつづけてきた。個人の巡礼経験等もここでは地域の多様性を作り出す重要な要素として位置づけられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、人とモノの移動をとおして、インドネシア東部地域・マカッサル海峡島嶼部地域における海のネットワークとその社会経済的動態についての実証的地域研究をおこなったものである。

以下に、本論文において注目される主要な論点について要約する。

第一に、本論文は地域研究という接近法を強く意識して書かれたものであり、今後の地域研究の理解を深めるひとつのモデルを提示していることである。海のネットワークという言葉は決して新しい術語ではないにもかかわらず、移動性の高い生活様式をもつ人びとが営む社会経済生活の態様が、これほど具体的かつ多角的な視点から浮き彫りにされたことはない。この点が地域研究の分野できわめてパイオニア的な仕事としての本論文のもっとも優れた点である。オランダ東インド会社による香料交易の展開以降マカッサル海峡地域は中継港として繁栄を成し遂げたが、これまで多くの論考が西洋からの視点をなぞったものであることを本論文では鋭く指摘し、歴史の間隙を埋める作業をおこなった。島嶼部地域の歴史を参与観察に基づく聞き取り調査やマレー半島から移り住んだムラユ人末裔の歴史的資料を手がかりにあとづけ、海と島がひとつの有機的なまとまりとして存在することが実証されている。本論文では、あらかじめ地域のまとまりを設定して調査に臨むのではなく、調査地の中に足場を設定した。そこから国境や行政上の枠組みに捕らわれない地域を観察した試みは、今後の地域研究を発展させる斬新な試みである。

第二の論点は、これまでおこなわれてきた南スラウェシ地域研究に欠けていた視点を埋める貴重な民族誌的貢献である。インドネシア国内のみならず、国境を接する近隣諸国の随所で、南スラウェシ地域から移動してきた民族集団ブギス-マカッサル人に関する研究が蓄積されている。しかしながらそれらの記述は移住先に根を下ろした社会経済生活の営みや歴史的記述であることが多かった。「海の商人」「海洋民族」という修辞が、かならず添えられる人びととして知られているとはいえマカッサル海峡島嶼部地域で生活するブギス-マカッサル人についての研究は意外にもおこなわれていない。本論文では歴史的考察を踏まえた上で、過去100年ほどの間に生じた生業構造の変化をとおして、かれらの社会を考察している。ナマコ漁からハタ漁への転換は、マカッサル海峡島嶼部地域が首都ジャカルタよりも国境を越えた近隣諸国との密接なネットワークが構築されていることの証左として詳述されている。この変化の過程における出漁の際に携帯されてきた発酵保存食品の商品化の考察は、ブギス-マカッサル社会における女性の経済活動と移動に関する論考へと展開している。

第三の論点は、上述の女性の経済活動と移動に関する論考を、この地域の主要な宗教であるイスラームにおけるマッカ巡礼経験をめぐる社会経済活動の分析へと展開させていることである。宗教的実践が、社会的地位の獲得へと繋がる過程において、海のネットワークを基盤に経済活動を営む女性の生活誌が詳述されている。ブギス-マカッサルの女性の移動と商業活動に関する研究はこれまでのところ皆無であり、もともと調査蓄積の少ない海洋地域の社会の資料的価値という点においても、大きな成果である。

本論文は、これまでほとんど研究蓄積のなかった海のネットワークとマカッサル海峡地域を多角的かつ重層的な視点から

実証的にとらえることに成功した。このことは、東南アジア島嶼部地域研究に大きく寄与するものである。また地域研究において地域というくりがどのように設定されるものであるか、新たな議論を発展させる実証的研究として貢献度はきわめて大きい。以上のように、本申請論文は、文化・地域環境学専攻東南アジア地域研究講座にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果と判断される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成15年11月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。